

C.S.ルイスの神の存在証明

高橋 清隆

日本大学大学院総合社会情報研究科

C.S.Lewis's Arguments for the Existence of God

TAKAHASHI Kiyotaka

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this paper focuses on C. S. Lewis's arguments for the existence of God. Typical arguments for the existence of God are teleological, cosmological, ontological and moral.

As you know, Kant insisted that philosophical way of arguments can not completely prove the existence of God, but Lewis used these four arguments.

First of all, I will present an outline of each argument, and next make it clear how Lewis used each of them to prove the existence of God. And last of all, in order to help us to understand his view of Christian apologetics, I explain why Lewis used the arguments.

1.はじめに

本稿の目的は、C.S.ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) の著作に見られる神の存在証明を提示しようとするものである。

カントは、神の存在を思弁的理性によって証明する際、自然神学的証明、すなわち目的論的証明、宇宙論的証明、存在論的証明の三つに分類されとした。目的論的証明とは、感覚界の特殊な性質、すなわち合目的性から、例えば、神の存在を世界の仕組みや秩序から証明しようとするものである。宇宙論的証明とは、世界から神へと遡及して、宇宙の存在の根源的拠りどころ、あるいは、説明となる絶対的な存在として神の存在を論証しようとするものである。存在論的証明とは、神の概念はすべての人にあるとして、神の存在の論証を帰納的にその概念の中に見出そうとする証明方法である¹。また、カントは『実践理性批判』において、道徳的証明から神の存在を証明する方法があるとする²。この四つが一

般的に用いられている神の存在証明の方法である。

本稿では、それらの一般的な証明方法を見た後に、ルイスのそれらに対する証明方法を検証する。なお、本稿で用いる聖書の引用は、特に断りのない場合を除き、日本聖書協会『聖書－新共同訳』に依拠するものとする。

2.目的論的証明

(1) 目的論的証明の概念とその証明方法

目的論的証明とは、一つの体系の中に物事が秩序正しく配列されていることの結果は、それをもたらした原因が理知のあることを示す、という考え方である。聖書の基盤は『詩篇』94編9節にあると思われる。

耳を植えた方に聞こえないとでもいうのか。
目を造った方に見えないとでもいうのか。

目は見る目的のため、耳は聞く目的のため造られた、という意見である。目的論的神の存在証明とは、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1225 頃-1274) に拠れば、自然の秩序には明白な設計のしるしがあ

¹ カント著、篠田英雄訳『純粋理性批判 (中)』岩波文庫、1961、pp.257-258。

² カント著、波多野精一、宮元和吉、篠田英雄訳『実践理性批判』岩波文庫、1979、pp.249-252。

り、その設計から神の存在を証明しようとするものである。その代表的な例は、英国の神学者・自然哲学者であったウィリアム・ペイリー（William Paley, 1743-805）である。ペイリーは『自然科学』（*Natural Science*, 1802）の中で、時計という機械装置が、設計と組み立てる能力が必要であるのと同様、自然という、より複雑な構造においては、なおさら考案や工夫が必要であると主張した³。ペイリーの例えは、時計装置の設計に合目的性を置き、神の存在を証明しようとしている。この考え方は、世界は合理的に秩序だっているが故に計画者がいるという考えに繋がり、それは容易に、計画的に造られたすべてのものは神の業によるという考えに繋がる。

（2）ルイスの設計からの目的論的神の存在証明

ルイスは設計からの目的論的証明をするために聖書の『詩篇』を用いる。創造を信じる結果は、自然を所与としてではなく、神の偉業として見ることであり、104 編に書かれている神の創造物について触れる。そして次のように言う。

we all, lions, storks, ravens, whales—live, as our fathers said, “at God’s charges”, and the mention of all equally redounds to His praise⁴.

ルイスは、創造の結果としてのライオン、コウノトリ、ワタリガラス、鯨などが、神に頼って生きているのであり、それ故に、創造の原因である神に賛美が帰されると主張する。また、“The seeing eye”（*Christian Reflections*）に於いても、ルイスの目的論的証明を見ることができる。そこで、まずルイスは、ロシア人たちが宇宙探索において神を見つけることはできなかったことが⁵、神の存在の否定にはなり得ないと言う。続けて、神は実在するが、人々が、かつて考えていたように、宇宙のある一定の場所に

存在しているか、または、宇宙全体に立ち込めている事物ではないと言う。その結論の正しさを証明するためにシェイクスピアの劇を例えとして用いる。宇宙探索によって神を発見しようとすることは、シェイクスピア自身を登場人物のうちに、ストラトフォードを芝居の場面に見ようとする目的で、シェイクスピア劇を残らず読むか、見ようとするようなものだ、と言う。劇が作者なしで成り立っていると考える愚か者が、シェイクスピア劇を残らず読んだが、シェイクスピアは劇の中に見つけられなかったと告白したとしても、シェイクスピアの実在についての信念は少しも揺るがない。シェイクスピアはある意味でシェイクスピアのすべての劇で出てくるのである。シェイクスピアが作者であるので作者の意図が劇中に見出されるのは当然である。そして次のように言う。

My point is that, if God does exist, He is related to the universe more as an author is related to a play than as one object in the universe is related to another⁶.

ルイスは、神の宇宙への関係は、作者が劇に関係するのと等しいと主張する。つまり劇作家が意図を持って劇を創作し、その意図が劇中に見られるがごとく、神も意図を持って宇宙を創造し、その意図が宇宙に見られるとするのである。

（3）神話を用いての目的論的証明

ルイスは神話に基づき、目的論的神の存在証明を提示する。この方法はルイス独特のものと言える。まず、神話のどの部分が神の存在証明と関係するのか『キリスト教の精髄』（*Mere Christianity*, 1952）を見てみたい。

He sent the human race what I call good dreams: I mean those queer stories scattered all through the heathen religions about a god who dies and comes life again and, by his death, has somehow given

³ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、pp.343-346。

⁴ C.S.Lewis, *Reflections on the Psalms*, Marine Books, 1958, p.85.

⁵ 聖書では、神は天にいとされている。（『マタイによる福音書』6章9節）

⁶ C.S.Lewis, *Christian Reflections*, Wm.B.Eerdmans Publishing Co., 1967, p.168.

new life to men⁷.

ルイスはここで、世界には、死んで蘇る神についての神話を含む宗教が数多くあると言うが、その神話をキリストの受肉に関連付け神の存在証明を図る。

Now as myth transcends thought, Incarnation transcends myth. The heart of Christianity is a myth which is also a fact. The old myth of the Dying God, *without ceasing to be myth*, comes down from the heaven of legend and imagination to the earth of history. It *happens*—at a particular date, in a particular place, followed by definable historical consequences⁸.

キリスト教の核心は神の死と再生の神話であり、その神話が神話であり続けながら、それが実際に、ある一定の時と場所で起こり、キリストの設立した教団は今日に至るまで存在すると言う。つまり異教の神話はキリストにあって成就した、とルイスは主張するのであり、それ自身がルイスの神話を用いての神の存在証明になるのである。

(4) 憧れからの目的論的証明

憧れから目的論的神の存在証明をしようとするのもルイス独特のものである。ルイスは何に憧れたのだろうか。ルイスは幼い日に三つの特別な驚異体験をする。一つ目は、ある夏の日、スグリの藪のそばに立っているとき、不意に、兄ウォレンが作ったおもちゃの庭の思い出が、数年前ではなく、何世紀もの時を隔ててやってきた。これは衝撃的な何かに対する憧れであったが、それを知る前にその憧れは過ぎ去ってしまった。二番目は *Squirrel Nutkin* を通してであった。そこには、秋の感触としか言えないものが描かれており、ルイスは衝撃を受けた。季節に対する強烈な憧れを経験したのである。三番目の経験は *Drapa* という詩を通してであった。力強い韻

律を感じ取ったが、別の喜びが、遙か彼方からやってきた。この三つの経験の共通点をルイスは次のように語る。

it is that of an unsatisfied desire which is itself more desirable than any other satisfaction. I call it joy, which is here a technical term and must be sharply distinguished both from Happiness and from Pleasure⁹.

その喜びは日常生活で得られるものとは異なる、異次元からくるような喜びなのである。そして次のように言う。

anyone who has experienced it will want it again¹⁰.

ルイスが経験した喜びとは、求めても求め止まざるものなのである。ではこの喜びの正体とは何であろうか。

If I find in myself a desire which no experience in this world can satisfy, the most probable explanation is that I was made for another world¹¹.

その喜びは、この世のものではなく、別の世界に属するものであるとルイスは主張する。では別の世界とは何であろうか、それは、ルイスのファンタジーを含む他の作品に手がかりを見つかることができる。例えば、*The Voyage of the Dawn Treader* の中でリーピチープが朝びらき丸を離れて小船に乗り、幼いときから憧れたアスランの国に旅立つ。それ以来、彼の姿を見るものはなかったが、リーピチープがアスランの国に行きついて、今もなおそこで生きていと固く信じられていることや¹²、ユースチス、エ

⁷ C.S.Lewis, *Mere Christianity*, HarperCollins Publishers, 1952, p.50.

⁸ C.S. Lewis, *God in the Deck*, HarperCollins Publishers, 1970, p.66.

⁹ C.S.Lewis, *Surprised by Joy—The Shape of My Early Life*, Marine Books, 1955, p.17.

¹⁰ Ibid., p.18.

¹¹ C.S.Lewis, *Mere Christianity*, HarperCollins Publishers, 1952, pp.136-137.

¹² C.S.Lewis 著、瀬田貞二訳『朝びらき丸 東の海へ』岩波書店、1966、p.298.

ドマンド、ルーシーもナルニアからではなく、自分たちがいた、現実の世界からアスランの国へ行けること¹³などは別の世界が何であることを示唆している。そして、*The Pilgrim's Regress*において、JohnとVertueが最後に小川を渡ってLandlordの国に行く事¹⁴は、別の世界へ、換言すれば天国へ行くことを表している。

ルイスは天国への憧れを目的論的神の存在証明へと繋げる。

人間の肉体的な飢えは、だからその者はパンを手に入れるということにはなりません。彼は大西洋上の筏の上で飢え死にするかもしれません。しかし人間の飢えが、人間は食うことによってその体力を回復し、食物の存する世界に住む種族であることの証拠なることは確かです。同様に、わたしの天国への願望が、わたしがそれを享受するだろうという証拠になるとは信じませんが（信じられるといいのですが）、それはそういうものがあるということ、それを享受する人もあるということの、かなり確かな徴だとは思うのです¹⁵。

ルイスにとって天国への憧れは、天国の存在を確信するに足る証拠なのである。ルイスが、天国とは神が人間のために用意した場所であることを信じることを考慮に入れると¹⁶、天国への憧れは目的論的神の存在証明の証左となりうると思われる。

3.宇宙論的証明

(1) 宇宙論的証明方法の概念とその証明方法

トマス・アクィナスは、出来事の因果関係はどこかの点での第一原因に、つまり、神に行き着くとした。宇宙論的証明は次の四つの段階を経る。1.宇宙

のあらゆるものは、その存在を他に依存する。2.個々の部分で真であることは、宇宙全体においても真である。3.宇宙が存在した、また、する限りは、その存在を他に負う。4.宇宙はその存在を神に負う、というものである¹⁷。つまり、宇宙には始まりがあり、その始まりは神に起因するという考え方である。この考え方は、宇宙は「ビック・バン」によって始まったとする理論に大きく関係する。この証明の聖書的基盤は『ヘブライ人への手紙』3章4節にあると思われる。

どんな家も誰かが造るわけです。万物を造られたのは神なのです。

神が宇宙を造った、つまり、宇宙には始まりがあった、という考えが見てとれるのである。

(2) ルイスの宇宙論的証明

ルイスは、宇宙には始まりがあったと主張する。

In one respect, as many Christians have noticed, contemporary science has recently come into line with Christian doctrine, and parted company with the classical forms of materialism. If anything emerges clearly from modern physics, it is that nature is not everlasting. The universe had a beginning, and will have an end¹⁸.

ルイスは、宇宙は偶然にして存在したと主張する唯物論と、意識と目的を持ち宇宙が造られたという宗教的見解を比較する。唯物論は、ここでの引用にもあるように現代物理学により否定された。つまり、宇宙には始まりがあるのである。しかし、科学は日々変わるので、それを当てにしてはいけないとルイスは警告する¹⁹。また、科学に関して次のようにも言う。

¹³ C.S.Lewis 著、瀬田貞二訳『朝びらき丸 東の海へ』岩波書店、1966、p.300。

¹⁴ C.S.Lewis, *The Pilgrim's Regress*, HarperCollins Publishers, p.197.

¹⁵ C.S.ルイス著『栄光の重み』新教出版社、1976、p.13。

¹⁶ C.S.Lewis, *The Problem of Pain*, HarperCollins e-book, 1940, p.152.

¹⁷ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.341。

¹⁸ C.S. Lewis, *God in the Dock*, HarperCollins Publishers, 1970, pp.38-39.

¹⁹ Ibid.

Science works by experiments. It watches how things behave²⁰.

科学は実験によって事実を提示するだけである。従って、科学は以下の質問に答えを与えることができないと言う。

Supposing science ever became complete so that it knew every single thing in the whole universe. Is it not plain that the questions ‘Why is there a universe?’ ‘Why does it go on as it does?’ ‘Has it any meaning?’ would remain just as they were²¹?

宇宙は偶然にできたものなのか、それとも始まりがあり、他に依存するものなのかを知る方法は、人間を観察することである。その観察により、宇宙を宇宙たらしめる力の存在、つまり、それを造りだした者の存在や²²、人間は独立に存在しているのではないことを知るに至るのである²³。ルイスの、宇宙には始まりがあり、また被造物である人間は神に依存することを認めたこの主張は、宇宙論的神の存在証明といえる。

4.存在論的証明

(1) 存在論的証明の概念とその証明方法

存在論的証明はカンタベリーのアンセルムス (Anselmus, 1032 頃-1109) に代表される。アンセルムスは『プロスロギオン』において神を「それよりも偉大なものが考えられ得ないもの」と定義する。この定義が正しければ必然的に神は存在することになる。その理由は、(1) もし神が存在しないのであれば、神の観念だけが残し、神の実在がない。(2) 神の実在は神の観念よりも偉大である。(3) もしも、神がそれよりも偉大なものが考えられ得ないものであるならば、神の観念は神の実在を受け入れる、とい

うものである²⁴。アンセルムスの論点は、人間の精神の中に、あるものが存在するのであれば、これに対応する実在もまた存在する、というものである。この理論に反対したのはベネディクト会の修道士ガウニロである。ガウニロは『愚かな者に代わっての返答』の中で、美しく、あらゆる点で他の島よりも勝っている完全な島が現実存在することは疑う余地がない。その島は想像の中にもあるのだから。想像の中と実在の両方に存在する島のほうが優れているのでその島は存在しなければならない。なぜなら、もし存在しないなら、実際に存在する島のほうがよりすぐれた島になってしまう、という理論で島の存在を納得させようとするのは無理があると言う。ガウニロの論点は、島は存在しなければならない。なぜならば島の実在は島の観念よりも必然的にいっそう完全であるからだ、というものである²⁵。それに対してアンセルムスは、神と島の本質的違いを持ってガウニロに反駁する。なぜなら、「それよりも偉大なものが考えられないもの」を神の本質として定義しているからである。神は他の全てを超越する存在なのである。つまり神の本質的要素が定義に含まれているのである。このことを理解した人は信仰を持ち、その結果、その人にとって神は実在者となりうる。つまり、この存在論的証明方法は神が実在者であるという信仰を持たせるものであるといえる²⁶。この証明方法はT.H.グリーンの「思考とは存在するものすべて——存在する可能性のあるもの、あるいは存在が考えられるすべてを含めた——の必然的な先行条件である」²⁷という言葉に総括されるだろう。

存在論的証明方法はデカルトにも見られる。「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する」という彼の言葉は、思考が存在に先行することを表したものである。また、デカルトは幾何学を用い、存在が概念の中に含まれていることを示す。三角形という存

²⁰ C.S.Lewis, *Mere Christianity*, HarperCollins Publishers, 1952, p.22.

²¹ Ibid., p.23.

²² Ibid., p.24.

²³ Ibid., p.25.

²⁴ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.332。

²⁵ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.334。

²⁶ 同上、pp.334-335。

²⁷ ヘンリー・シーセン著、田島福安訳『組織神学』いのちのことば社、1961、p.104。

在は、三つの角の和は二直角に等しいという概念に含まれると言うのである。それと同様に、神の本性を認識することが神の存在を証明するとした²⁸。このように、デカルトは存在論的証明から帰納的に神の存在を証明しようとした。

(2) ルイスの存在論的証明

ルイスが在論的証明をどのように用いたのかは、Nancy Warner に宛てた 1963 年 10 月 26 日付の手紙に見られる。

I have simply put the ‘ontological proof’ in a form suitable for children. And even that is not so remarkable a feat as you think²⁹.

ルイスは存在論的証明を明瞭に、子ども向けにふさわしい仕方に取り入れたと言う。上記引用の注釈によれば、その箇所は、*The Silver Chair* の 12 章である。登場人物はアスランの存在を否定する The Queen of Underland と、それに異議を唱える Puddleglum である。The Queen of Underland は次のように言う。

“I see,” she said, “that we should do no better with your *lion*, as you call it, than we did with your *sun*. You have seen lamps, and so you imagined a bigger and better lamp and call it the *sun*. You’ve seen cats, and now you want a bigger and better cat, and it’s to be called a *lion*. Well, ‘tis a pretty make-believe, though, to say truth, it would suit you all better if you were younger. And look how you can put nothing into your make-believe without copying it from the real world, this world of mine, which is the only world. But even you children are too old such play. As for you, my lord Prince, that art a man full grown, fie upon you! Are you not ashamed of such toys? Come, all of you. Put away

these childish tricks. I have work for you all in the real world. There are no Narnia, no Overworld, no sky, no sun, no Aslan. And let us begin a wiser life tomorrow. But, first, to bed; to sleep; deep sleep, soft pillows, sleep without foolish dreams³⁰.”

The Queen of Underland は、真実の世界から、つまり、実際に存在するものからしか想像はできないと主張する。それに対し Puddleglum は次のように反論する。

“Suppose we *have* only dreamed, or made up, all those things—trees and grass and sun and moon and stars and Aslan himself. Suppose we have. Then, all I can say is that, in that case, the made-up things seem a good deal more important than real ones. Suppose this black pit of a kingdom of yours is the only world. Well, it strikes me as a pretty poor one. And that’s a funny thing, when you come to think of it. We’re just babies making up a game, if you are right. But four babies playing a game can make a play-world which licks your real world hollow³¹.”

Puddleglum は、想像は実在よりも重要であると反論するのである。その理由の一つとして、四人の赤ん坊の例を出す。赤ん坊は、今ある現実の世界を打ち負かして、うつろにしてしまうような、頭の中の楽しい遊びを考え出すことができるものだ、と言う。そして次のように続ける。

I’m on Aslan’s side even if there isn’t any Aslan to lead it³².

換言すれば Puddleglum はアスランの存在を信じているのである。理性が存在に先立つと主張するルイスが、裏付けとなる理論を容易にこの The Queen of Underland と Puddleglum のやり取りを

²⁸ デカルト著、谷川多佳子訳『方法序説』岩波文庫、1997、pp.45-52。

²⁹ Walter Hooper *The Collected Letters of C.S. Lewis Volume III*, HarperCollins e-books, 1963, p.1472.

³⁰ C.S. Lewis, *The Chronicles of Narnia The silver Chair*, HarperCollins Publishers, 1953, pp.188-189.

³¹ Ibid., p.190.

³² Ibid., p.190.

通して提示した。また、この二人の対話は、実在がなければ想像は存在しないと言うガウニロに対して、想像があればそれに対応する実在も存在すると主張したアンセルムを髣髴とさせる。アンセルムの理論が正しいかは未だに論争の的ではあるが、その役目は確かにある。その理論によって Puddleglum がアスランを信じるように、人が神への信仰を持たせるものなのである。

5. 道徳論的証明

(1) 道徳論的証明の概念とその証明方法

道徳は次のように定義されている。

人のふみ行ふべき道。ある社会で、その成員の社会に対する、あるいは成員相互間の行為の善悪を判断する基準として、一般的に承認されている規範の総体。法律のような外面的強制力を伴うものではなく、個人の内面的な原理³³。

これを敷衍すれば、道徳とは社会一般に受け入れられている善悪の判断基準であり、それは個人の内面が関係すると言う考え方である。道徳論的証明は人間の善悪の理念と関係する。

アキナスは、神の存在を証明するため『五つの道』を書いたが、その第四の道の中で、道徳論的証明を展開している。そこでは、真理や善や高貴さという人間の価値を生み出すのは、それ自体で、真理で善で高貴なものが存在していなければならず、その起源が神であるとする³⁴。また、カントは『実践理性批判』の中で、道徳的努力が意味あるものとなるために最高善者が必要であり、信じるべきものであるとする³⁵。

つまり、道徳論的神の存在証明の方法は大きく分けて、アキナスのように人間が道徳的なのはその源である絶対善者がいるから、という見方と、カン

トが言う、人間の善の努力に報いてくれるのに神の姿を想定するという二種類ある³⁶。

聖書は、神が最高善者であると主張する。

彼らは、このようなことを行ふものが死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行ふだけでなく、他人の同じ行為をも是認しています。(ローマ信徒への手紙 1 章 32 節)

イスラエル人は不義、悪、むさぼり、ねたみ、殺意、不和、陰口を避けることなどは死に値することを知っていたが、このような道徳律は人間が作ったものではなく神が与えた掟であると認識していた。彼らにとって神とは「法を与えられる方」³⁷、規律や善の源なのである。これは「神は善の源である」というアキナスの考え方に類似しているように思われる。

ルイスもこのアキナス的方法を用いて神の存在証明をしているように思われる。ルイスは 1945 年に、ウェールズ教会にて、若い指導者と僧職者たちに対して“Christian Apologetics”と題する講演を行った。その中で、ルイスは護教活動を始めた当初、二回講演があるのなら、最初の一回を神の存在証明に費やしたが、無神論者の聞き手が多くなかったためこの方法を次第にやめた、と告白している³⁸。後に、ルイスは四つの連続したラジオ講演を基にした『キリスト教の精髓』を書く。この本の目的は、キリスト教の玄関に人を連れてくることであるとルイスは告白する³⁹。それは、第二回のラジオ講演で、ルイス自身が長い間無神論者であり、外部からキリスト教はどのように見えるかという視点からキリスト教を見ることができるので講演を依頼されたのではないかと言う考えを述べたことから窺えるだろう⁴⁰。

³⁶ 本多峰子著『神は存在するか——神の存在証明』二松学舎大学、国際政経論集第 13 号、2007、p.115。

³⁷ 「イザヤ書」33 章 22 節。

³⁸ C.S. Lewis, *God in the Dock*, HarperCollins Publishers, 1970, p.100.

³⁹ C.S. Lewis, *Mere Christianity*, HarperCollins Publishers, 1952, p. X V.

⁴⁰ ウォルター・フーパー著、山形和美監修『C.S.ルイ

³³ 新村出編集『広辞苑』岩波書店、2008 年第 6 版、p.1982。

³⁴ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、pp.338。

³⁵ カント著、波多野精一、宮元和吉、篠田英雄訳『実践理性批判』岩波文庫、1979、p.252。

この本は四部構成であるが、最初の第一部は、道徳論的神の存在証明に費やされている。その証明方法を見てみたい。

(2) ルイスの道徳論的神の存在の証明

ルイスは、ほとんどの人間なら誰でも自然に知っており、わざわざ教える必要のない正邪に関する法則、ないしはルールのことを人間性の法則と呼ぶ⁴¹。人間の内面に、つまり、心の中にその法則はありと考えるのである。それは古今東西を問わない。例えば、エジプト、バビロニア、ヒンズー、シナ、ギリシア、ローマの道徳的教訓を比較してみると、それらがお互いに、またわれわれ自身の法則に甚だよく似ており、利己主義が否定されている。人は、この法則に従うべきであると考え、その通りには生活していない、つまり、自然の法則を破っている、と言う⁴²。

人間性の法則は群居本能ではないかという反論があるが、ルイスはそれを否定する。ルイスは危険に直面した人を例に取り、助けたいという気持ち（群居本能）と、その危険から離れたいという気持ち（自己保存の本能）が生じるが、その二つに加えて第三のもの、逃げ出したい気持ちを抑えて、助けてやりたいという衝動に従えと命じる何かがあり、この第三のものを基準として人は行動する、と言う⁴³。また、人間の法則とは、社会的なしきりなどのようなもので、教育によって得たものではないのか、という反論に対してルイスは、われわれがそのようにして学ぶ事柄には二種類あり、左側通行のように単なるしきりであって、右側通行でもかまわないものと、もう一つは勝手に変えられない不動のものがあり、人間の法則は後者に属すると言う。その理由は、ある民族の道徳と他民族の道徳を比較して、一方の道徳規準が優れているという場合、実は第三の道徳規準、つまり真の道徳規準でその両者を測っていることになる。このことは、人の主観とは関係ない、客観的

な真の正しさの存在を認めていることになる⁴⁴。人間性の法則は、決して社会的なしきりではないと、ルイスは主張するのである。

では、人間性の法則は実在するのだろうか。石は重力の法則にしたがって落下する。石が支えを失った場合、この法則にしたがって落ちるのは単なる事実であり、事実として起こることとは別の、起こるべきことに関する法則というものはない。しかし、人間性の法則は「人間が現実に行うこと」を意味しない。人間について考える場合、現実や事実を超えた何かが入ってくる。つまり、人は何をなすかという事実のほか、人は何をなすべきかというもう一つの問題が加わる。この観念は振り払うことは不可能であるし、振り払ってしまえば、人間に関しての意見は無意味になるとルイスは言う。このような理由から、人間の行為という普通の実事を超えながら、決定的に実在的なもの、それは我々が作ったのではないが、我々に向かって押し迫ってくる真実の法則を認めざるを得ないという結論にルイスは達する⁴⁵。

その法則の背後には人間以外の誰かがいるのか、という点に関して、ルイスは、それは科学では証明することはできないと言う。なぜなら、科学は実験によって作業し、事物がどのように行動するかを観察するものだからである。ある物がなぜ存在するに至ったか、また、科学の観察する事物の背後には何かがあるのか、こういった問題は科学的な問題ではないのである。もし「背後にあるもの」が存在するとすれば、それは永久に人間には知られないままでいるか、普通とは違った仕方では自己を顕示するかわいずれかである。もし宇宙が偶然ではなく、宇宙を宇宙ならしめている力があるとすれば、それは観察される事実の一つではなく、それらを作り出した実在であるから、単に事実観察によってはそれを見出せない。その力が本当に存在するのか、その答えを知るきっかけは我々自身である⁴⁶。

その背後にある力は何か。ルイスは二つの証拠品をあげる。一つ目は、創造された宇宙である。創造

ス文学案内事典』彩流社、1998、p.236。

⁴¹ C.S. Lewis, *Mere Christianity*, HarperCollins Publishers, 1952, p.5.

⁴² Ibid., p.8.

⁴³ Ibid., pp.9-12.

⁴⁴ Ibid., pp.12-14.

⁴⁵ Ibid., pp.16-20.

⁴⁶ Ibid., pp.22-23.

者は偉大な芸術家である。なぜなら、宇宙は大変美しいところだからだ。だが、彼は全く無慈悲であり、人間の友達ではない。なぜなら宇宙は大変な危険な、恐ろしいところだからだ。二つ目は、道徳的法則である。そこから、宇宙の背後にある存在は、正しい行為、つまりフェアプレー、非利己性、勇気、信義、正直、誠実といったものに対して強烈な関心を示している、とルイスは言う⁴⁷。

このようにルイスは人間の法則には背後があり、その背後にいる者は絶対善の神⁴⁸であると主張することから道徳論的神の存在証明を展開した。ルイスは1945年に神の存在証明を一旦止めている。しかし1952年の『キリスト教の精髓』の出版に際して再び道徳論的証明を通して神の存在証明を展開している。そしてこの証明方法は『キリスト教の精髓』の最初の部分を費やしている。この本の目的を鑑みると、この証明方法は、まだ神の概念を持っていない人に対して最も有効に働き得るかもしれない。

6.神の存在証明について考える意義

さて、今まで神の存在証明のさまざまな方法を見てきたのであるが、それらによって神の存在が確実に証明されるのであろうか。また神への信仰を持っていない者を信仰へと確実に導くことができるのであろうか。カントは思弁的理性からの目的論的証明、宇宙論的証明、存在論的証明によって神の存在を証明することはできないとした⁴⁹。またキリスト教神学の内部の一般的な合意として、理性によっては個人を神の信仰へと導くことはできないとしている⁵⁰。

それにもかかわらず、ルイスは思弁的理性から、神の存在を証明しようとした。その理由は何であろうか。ルイスは信仰にはA—確固とした知的同意と、B—神に対する信頼、信用を表すものと二種類に分

類する。そして次のように言う。

Philosophical arguments for the existence of God are presumably intended to produce Faith—A⁵¹.

神の存在証明は信仰—Aを生み出すことに役立つのである。これは、神の存在の蓋然性を示すにとどまるのかもしれない。しかし、この信仰—Aが信仰—Bを生み出す基盤となるのである。存在論的証明方法には神が実在者であるという信仰を持たせる論拠があると前述したが、ルイスも同様のことを言うのである。

7.おわりに

ルイスは思弁的理性によって神の存在を証明しようとした。特に神話や憧れから目的論的神の存在証明はルイス独特のものであった。憧れからの目的論的証明や存在論的証明はルイスの『ナルニア国年代記物語』にも見られ、子供も知らずにその証明方法に接することができた。そのすべては確固とした知的同意に基づく信仰を築き上げるものとなり、ひいては神を信頼する信仰を持つに至るという目的を持っていた。このことはルイスがどの年代の者に対しても「まじりけのないキリスト教」を弁証しようとした証左になると思われる。

(Received: September 30, 2014)

(Issued in internet Edition: November 1, 2014)

⁴⁷ C.S. Lewis, *Mere Christianity*, HarperCollins Publishers, 1952, pp. 29-30.

⁴⁸ 神は決定的に「善」であり、悪は腐った善、つまり善を間違った仕方を用いたものであるとする。Ibid., p. 44.

⁴⁹ カント著、篠田英雄訳『純粹理性批判（中）』岩波文庫、1961、pp. 259-279.

⁵⁰ A.E. マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、pp. 331.

⁵¹ C.S. Lewis, *God in the Dock*, HarperCollins Publishers, 1970, p. 173.